短歌・俳句に学ぶことばの力

――主体的に活動する場をどう作るか――

頼岡由美

一　はじめに―主題設定の動機―

1　読解中心の授業スタイルへの問題意識と学習者の可能性

本校は、普通科で1学年8クラス（理数コース1クラスを含む）、全校24クラスの高等学校である。生徒のほとんどが進学を希望しており、各教科では入試に対応できる学力をつけることが重視されている。

そういう中で、読解中心の自分の授業スタイルでは、学習者に主体的な学習の手ごたえを感じさせられていないのでは、という問題意識があった。また、学習者は、自分の言葉で考えを述べることに自信がないように見える一方で、伝えたい「内容」とそれを表現したいという「意欲」がある時には素晴らしい能力を発揮するということも感じていた。そこで、そういう学習者の持っている能力をもっと授業の場で発揮させ、伸ばすために、生徒が主体的に考察し、想像し、表現し、伝え合う場を授業の中にどう作りだしていくか、という課題に取り組んでみようと考えた。

2　「ことばの力」と「短歌・俳句」について

「ことば」は「力」を持っている。普段の生活の中で、人生を支え、人を慰め、逆に落胆させもする「ことば」。文学においては、美しい情景や世界観、複雑な精神世界を描き出し、自分とは別の人生を生きさせてくれる。「ことば」の、人と人生に対する影響力は大きい。

この単元では、短歌・俳句を通して、この「ことばそのものが持つ力」や「ことばの持つ可能性」を感じ取らせたい、というのが一番大きな思いであった。言葉の持つ力を実感できた時、自らの言語能力を高める学習への意欲が生まれるのではないかと考えたからである。短歌・俳句は、限られた字数の中で、ある心情や情景を描き出すために、修辞法や表現技法に工夫を凝らし、一語一語を吟味し尽して表現されている点で、「ことばの持つ力」を実感させるのには最適な教材だと考えた。また、小説のように具体的な登場人物や

設定がないだけに、読む者の想像にある程度まかせられ、多様な読みが可能なところも、学習者の主体性を引き出しやすいと考えた。

3　本校の総合的な学習と、国語科授業の課題

本校では、「総合的な学習の時間」において、次のような学習を行っている。

1年次	オリエンテーション・職業研究・進路研究・学部学科研究・課題研究（課題の設定・文章表現・相互評価）社会理解（新聞学習）
2年次	新聞学習・学部学科研究・大学の模擬体験授業・課題研究（課題の設定・文章表現・相互評価）・修学旅行（テーマ設定・情報の収集・整理・表現）
3年次	文章表現（現代社会の諸問題について考察・文章表現）課題研究（課題の設定・情報の収集と整理・分析と考察・まとめと表現）

このように、本校では、「論理的な文章を読む力」や「論理的に思考し表現する力」を養うことについては、国語科授業だけでなく総合的な学習においても、力を入れて行っている。

しかし、実際に生徒の様子を見ていると、筋道立てて論述する文章の型はある程度習得していくが、内容の構築については、課題文をなぞり直した程度の、通り一遍で表面的なものが多い。提起された問題を自らの問題としてとらえなおし、その問題に通じる事象を自分の身の回りの生活の中から見つけ、それを根拠として自分の意見を展開していくという力が不足しているように思われる。これは、「想像する力」「発想する力」の不足とも言い換えられる。

国語科授業の中で、これらの「力」をどのように「習得」させたらよいのだろうか。また、その「活用」の仕方にはどんな方法が考えられるだろうか。

今回の実践は、短歌・俳句という日本の伝統的な言語文化を通し、「想像する」ことそのものを目標の一つに掲げてこの課題に取り組んだものである。その中で何をどのように「習得」「活用」させることができたのか、そしてそれがどういう「探究」につながっていくのか、学習指導要領の内容に照らし合わせて検証し、考察していきたい。

二　授業の計画と実際

1　実施時期　　二〇一一年十一月初旬～下旬
2　対象学年　　高校二年生文型クラス（41名×2クラス）
3　使用教材　　教科書『改訂版　現代文』（第一学習社）
4　単元名　　創作の楽しみ　『短歌と俳句』　7時間計画
5　単元観・指導観

本単元は、近現代短歌、近現代俳句について、鑑賞と創作の両面からの学習を通して、形式や表現方法の特色を理解し、短詩型文学の鑑賞と創作の楽しみを味わえるように設定されている。「犬」「猫」「蝶」「走る・歩く」「飲む・食う」という、五つの題詠が設定

され、題詠ごとに短歌四首・俳句四首が収録されている。一つの題詠の中でも、モチーフ、表現方法、視点など多様な変化が見られるように精選されている。

短歌・俳句は、限られた字数の中で豊かな心情や情景を表現するために、一語一語が吟味され、言葉の組み合わせ方や修辞法など工夫が凝らされている。題材も学習者の身近なものが取り上げられており、想像力を働かせてことば一つ一つを味わっていく学習に最適である。

作品の言葉、表現について感性や想像力を働かせて情景や心情を的確に把握し、多様な表現方法と、その効果を考えさせたい。そしてそこに表現された豊かな世界を味わい、「ことばの力」を実感させたい。また、最終的には自分で創作してみるということを目標に掲げることで、教科書作品の発想や視点に自ら着眼し、自身の創作に取り入れようという意欲も喚起したい。そして、書く活動・暗唱・意見交流などの様々な言語活動を通して、主体的に学習に取り組む姿勢を養いたい、と考えた。

6　単元の目標

①　情景や心情を把握し、より深く味わう鑑賞の仕方を身につける。

②　短歌・俳句の形式と表現方法の特色とその効果を理解し、創作に生かすことができる。

③　発想や想像力を豊かにし、言葉に対する感受性を磨く。

7　単元の評価規準

【関心・意欲・態度】

①　現代短歌・現代俳句に親しみ、表現に即して、その情景や心情を進んで想像したり理解したりしようとしている。

②　学んだ表現方法の特色を進んで創作に生かそうとしている。

③　級友の文章や作品を進んで読み味わい評価しようとしている。

【話す・聞く能力】

①　表現から読み取ったことや考えたことを、相手に分かるように工夫して伝えることができる。

②　他の学習者の意見や授業者の言葉に耳を傾け、的確に聞き取り理解することができる。

【書く能力】

①　作品の表現に即して、情景や心情について考えたり想像したりしたことを、的確な言葉で文章に表現することができる。

②　現代短歌・現代俳句の表現方法の特色を生かして短歌・俳句を創作することができる。

【読む能力】

①　現代短歌・俳句の表現から、表現方法と効果・特色について考えを深め、作品の情景や心情を豊かに味わうことができる。

【知識・理解】

①　短詩型文学の表現方法とその効果・特色について理解している。

8　指導の計画（全7時間）

時	学習内容	評価規準
1	短歌・俳句の鑑賞の基本となる表現技法について理解する。「犬」一首・一句の読解・鑑賞・暗唱を通して鑑賞の仕方を知る。	関① 読① 知①
2	「猫」二首・一句の読解・鑑賞・暗唱・鑑賞文作成。豊かに想像するとはどういうことか学ぶ。	関①③ 読①
3	「飲む・食う」二首・二句の読解・暗唱・鑑賞文作成・意見交流。読み取ったことを相手に分かるように工夫して表現して話し合う。	関①③ 話①② 書①
4	「蝶」二首・二句の読解・鑑賞・暗唱・鑑賞文作成・相互評価。想像したことを的確に自分の言葉で表現する。読み合って文章で相互評価。	関①③ 書① 読①
5	「走る・歩く」一首・一句の読解・鑑賞・暗唱・鑑賞文作成・相互評価。グループで読み合い、優れた鑑賞文を話し合って選び、発表する。	関①③ 書① 読①
6	短歌一首・俳句一句を創作	関②③ 書② 知①
7	生徒作品の相互鑑賞・相互評価	関①③ 読① 知①

9　全体を通して心がけた点

Ⅰ　ワークシートの使用

鑑賞文の作成をはじめとする様々な活動の時間を十分確保するために、すべてワークシートを用いて授業を行った。目標や、活動に必要な指示や支援、評価の欄まですべてワークシートに入れて、学習の流れが学習者に分かるように心がけた。

Ⅱ　目標の明示と自己評価

単元の目標と、時間ごとの目標をワークシートの冒頭に掲げて、毎回明示し、授業の初めに確認した。これは、目標を毎回学習者に意識させることで、意欲と主体性を持たせることを狙いとした。また、ワークシートの最後に、その日の学習の目標に対する自己評価の欄を設け、自己の学習を振り返らせた。

Ⅲ　ステップアップ

「知識理解」「読解と鑑賞」「創作」という流れで学習を進めていった。中盤の「読解と鑑賞」は、何時間もかけて合計10個の俳句と短歌を読解・鑑賞するため、単調にならないよう、各時間の目標を少しずつ段階を上げる形で設定した。また、授業に取り入れる言語活動や意見交流の仕方・評価の仕方も、できるだけ多様な形にして変化をつけ、かつ少しずつレベルを上げていくようにした。これは、このような学習に慣れていない学習者や、苦手意識を持っている学習者でも、少しずつステップアップしていけるように配慮したものである。

Ⅳ　受容的態度

想像したことを表現する活動に学習者が臆さないように、出

てきた読みに対してできるだけ受容的、肯定的に反応するように心掛けた。表現からずれた解釈をする場合もあるが、それは、互いの読みを根拠を交えて交流することで、自らの気づきとして学習されていくことが望ましいと考えた。

10　授業の概要

第一時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その1」）

Ⅰ　目標　短歌・俳句の基礎知識を理解する～より深く味わうために・創作の工夫に生かすために～

Ⅱ　導入　新聞の歌壇・俳壇の欄を配布し、幅広い年代の人が「短歌・俳句の創作」を楽しんでいることを知らせる。

Ⅲ　展開　（題詠「犬」）

①　短歌の鑑賞・創作のポイントが「構成」にあることを学ぶ。

【短歌の基礎知識の**習得**】

②　学習1　「犬」を題材にした短歌四首について、句切れ・句切れの上の句と下の句の関係を書き込ませる。発表させ、確認、解説する。

【短歌の基礎知識の**習得**と活用】

③　学習2「白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥鳴く春の川瀬に」の短歌について、表現されている世界を想像し、味わわせる。ワークシートの問いに答える形で書き込ませる。その際、「五感を使ってイメージする」ことを意識させた。発表させて共有する。

【短歌の基礎知識の習得と**活用**】

④　俳句の鑑賞・創作のポイントが「取り合わせ」にあること、季語、構成法、「切れ」についての基礎知識を学習させる。

【俳句の基礎知識の**習得**】

⑤　学習3「小春日や隣家の犬の名はピカソ」の俳句について、表現されている世界を想像し、味わわせる。ワークシートの問いに答える形で書き込ませる。発表させて共有する。

【俳句の基礎知識の習得と**活用**】

⑥　学習4　短歌「白き犬…」と、俳句「小春日や…」を暗唱させる。それを二人組で互いに聞き合い、相手のワークシートにサインする。全員で暗唱する。

⑦　自己評価する。

Ⅳ　学習者の反応

どの言葉を手がかりに、何について想像すればよいのかをワークシートにヒントとして示したこと、また書くスペースを少なくしたことなどから、鑑賞が苦手な者も取り組みやすかったと見られ、ほとんどの学習者が何らかのイメージを書くことができていた。しかし、分量には差があり、具体的に描写している者もいれば単語を並べただけの者もいた。しかしこの段階では、文章化よりも、作者の表現方法の工夫を理解することが目的で、「想像すること」は、表現方法の効果を実感するための手段であると考えたため、それでよしとした。

第二時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その2」）

Ⅰ　目標　短歌・俳句の表現方法工夫を踏まえて、心情や情景を豊かに想像する。

Ⅱ　展開　（題詠「猫」）

①　学習1短歌「やがて発光するかと思うまで夕べ追いつめられて白猫膨る」の鑑賞文例①②を比較しながら読み、「豊かに

想像する」「表現を味わう」とはどういうものか考えさせ、気づきを書かせる。発表させ、解説。比喩などの表現を手がかりにすること、「5W1H」（誰が・いつ・何を・どこで・どんな風に・なぜ）に注目すると具体的に想像が膨らんでいくことなど。

【短歌の鑑賞の仕方の**習得**】

② 学習2短歌「猫のひげ銀に光りて春昼のひとりの思ひ秘密めきたる」について、表現や構成を手がかりに、情景や心情について豊かに想像させ、ワークシートに書き込ませる。三人一組で読み合い、互いにサインする。全体で発表させ、読みを交流した。

【短歌の鑑賞の仕方の習得と**活用**】

③ 学習3俳句「黒猫の子のぞろぞろと月夜かな」について、学習2と同様の活動を行った。ただし、読み合う三人組は違う組み合わせにした。

【短歌の鑑賞の仕方の習得と**活用**】

④ 学習4　短歌「猫のひげ…」と、俳句「黒猫の…」の暗唱。第一時と同様。

⑤ 自己評価。

Ⅳ 学習者の反応

手がかりとする表現方法や構成方法を自分で見つけないといけないため、前時よりも難しかったようだ。そこからつまづいている学習者のために、活動の途中で、授業者が注目すべき表現を指摘したり、個別に具体的なヒントを出していったりと、かなりの支援が必要であった。

第三時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その3」

Ⅰ 目標　豊かに想像した心情や背景を、相手に伝わるように工夫して表現することができる。

Ⅱ 展開（題詠「飲む・食う」）

① 学習1短歌「カワセミが冷たき水をくぐるさま思ひつつ食ふ夏夜の豆腐」、俳句「母の日の手のひらの味塩むすび」の鑑賞文例を読み、鑑賞の仕方について前時の学習を思い出させる。

【短歌・俳句の鑑賞の仕方の**習得**】

② 学習2短歌「君と食む三百円のあなごずしそのおいしさを恋とこそ知れ」と、俳句「葡萄食ふ一語一語の如くにて」のどちらか一つについて、表現に注目して鑑賞文を書かせる。前時の反省から、ワークシートに想像する際のヒントを示した。

【俳句・短歌の鑑賞の仕方の習得と**活用**】

③ 学習3自分とは違う作品を鑑賞した人同士で二人組になり、互いに相手に伝わるように「話す」。聞き手は、ワークシートに従って質問をしながら相手から話を「聞く」。聞き手は、気づきや感想を具体的に相手に伝えて積極的に評価する。話し手と聞き手が交代して同じように行う。互いにワークシートにサインする。以上の活動を、ペアを変えてもう一度行う。

【的確に話す・聞く力の**習得**と活用】

④ 何人かに発表させ、全体で読みを交流した。

⑤ 学習4　短歌「君と食む…」と、俳句「葡萄食ふ…」の暗唱。

⑥ 自己評価。

Ⅳ 学習者の反応

学習者は鑑賞文に真剣に取り組み、全員が何らかの文章を作成

することができた。意見交流は楽しく活発に行われ、「主体的に取り組む」という目標はある程度達成できたと思われる。最後の自己評価は、全員が◎または○としており、自分なりに「工夫して表現した」という手応えは感じたようである。ただ、「的確に」表現できたかどうかについては、ワークシートの記述を見る限り、記述の量が少ないものや表現のつたないものも見られ、学習者の語彙力や表現力に差があることがうかがえた。また、言葉や表現技法をふまえての想像とは言えないものも多く見られた。次の時間への課題とした。

第四時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その4」）

Ⅰ 目標　表現の特徴を踏まえて豊かに想像した心情や情景を、的確に文章で表現することができる。

Ⅱ 展開　（題詠「蝶」）**※資料1参照**

① 学習1「春潮の…」の短歌と、「蝶々の…」の俳句についての鑑賞文例を読み、「表現の特徴を踏まえて」鑑賞する方法を学習させる。ワークシートの「特に注目した言葉」と、「鑑賞文」の文章のどこが対応しているか、アンダーラインをひかせて確認させた。　**【短歌・俳句の鑑賞の仕方の習得】**

② 学習2「姫蜆蝶…」の短歌と、「恋文を…」の俳句のどちらか一つについて、鑑賞文を書かせた。

【俳句・短歌の鑑賞の仕方の習得と活用】

③ 学習3自分とは違う作品を鑑賞した人同士で二人組になり、互いに読み合って評価させた。評価の方法は、1「表現の特徴を踏まえて想像できているか」2「それを文章に的確に表すことができているか」3特に感心した表現についてのコメント、という三点について、記号と文章で行わせた。その際、注目した言葉と鑑賞文の対応にアンダーラインをひかせ、確認させた。以上の活動を、ペアを変えてもう一度行った。

【俳句・短歌の鑑賞の仕方の習得と活用】

④ 何人かに発表させ、全体で読みを交流した。

⑤ 学習4　短歌「姫蜆蝶…」と、俳句「恋文を…」の暗唱。

⑥ 自己評価。

Ⅳ 学習者の反応と授業の課題

単元4時間目ということもあってか、鑑賞文を書く活動に慣れてきて、抵抗なく作業に入る様子が見られた。授業中の様子、ワークシートの記述からも、真剣に取り組んだ様子が伝わってきた。必ず書いたものを後で読み合うということも、書く意欲につながっていると考えられる。今回は、評価のポイントを明示したので、書く段階からそれを意識して取り組むことができたようである。またサインや口頭でのコメントではなく、短くても文章で評価し合ったことも励みになったようだった。

第五時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その5」）

Ⅰ 目標　表現の特徴を踏まえて豊かに想像した心情や情景を、的確に文章で表現することができる。

Ⅱ 展開　（題詠「走る・歩く」）

①本時の目標の確認。前時と同じ目標であるが、今回が鑑賞文を書く学習としては最後であり、今までの学習の総仕上げであることを強調した。

※資料1

創作の楽しみ『短歌と俳句』　その4

2年（　）組（　）番（　　）

★中元の目標　① 短歌・俳句の形式・表現方法の特色とその効果を理解する
② 短歌・俳句に表現された心情や情景を豊かに鑑賞する
③ 自分で創作している

★今日の目標　表現の特徴をふまえて豊かに想像した心情や情景を、的確に文章で表現することができる。

★今日の題詠　蟬

【学習〇】次の短歌と俳句についての鑑賞文を読んで、「表現の特徴をふまえて」想像するとどういうことが言えるかみよう。

「　春潮のあらがるきけば石こゆる蟬のつばさもまだつよからず　」　津野哲久

・句切れ【　句切れなし　】・構成　前半【　春潮のあらがる音　】―後半【　蟬が丘をこえる様子　】
・この歌の新鮮さ・おもしろさ
前半の春の潮の荒々しい激しい音と、後半の蟬の弱々しさがとても対照的なところ。
・特に注目した言葉・・・「きけば」…見るんじゃなくて「聞く」だから、次の音が聞こえているということ。
「まだつよからず」…今はまだ強くないけど、今から強くなる、という意じ。
・これらの表現に注目して、こんな風に想像しました。
まだ肌寒い早春のある日、海の近くの丘をこえようと飛んでいく蟬を見た。今日は風が強いせいか、海はかなり荒れているようだ。激しい波音が風に乗ってきっぱーんと聞こえてくる。蟬はまだ羽化したばかりなのか、弱々しい感じで、風に吹き飛ばされそうになりながら、必死に今にもなくなりそうな小さなつばさを羽ばたかせている。もっと少し暖かくなるころには、この蟬のつばさも今よりもっと大きく強くなって、力強く飛んで行けるようになるだろうか。

「蟬々のもの食ふ音の静かさよ」　高浜虚子

・季語【　蟬々　】季節【　　】
・取り合わせである二つの素材は（　蟬々　）と（もの食ふ音　）
・この俳句の新鮮さ・おもしろさ
蟬々は「音を鳴ら」イメージなのに、「もの食ふ」と人間のように表現してあるところ。
・特に注目した言葉・・・「もの食ふ」…「蟬々」は鳴くから、人間と同じようにものを食べて生きてるんだ、という意じ。
「音の静かさよ」…「よ」は詠嘆を表すから、なんて静かなんだ、とする感動がある。一方でやっぱり「音」というからにはかすかでも「音」が聞こえそうな気がする。
・これらの語や表現に注目して、こんな風に想像しました。
小さな蟬々が米の粒にとまってじっとしている。何をしているのかなと近づいていくと、花の中に細いストローのような差し込んで吸っている。ストローがかすかに動いている。人間がものを食べるときに口を動かすのと同じだ。こんな小さな生き物でも立派な蟬々も、人間と同じようにものを食べることで命をつないでいるんだな、と思う。なんだか切なくていとおしい。どんな音をたてているのか、息をひをめて耳をすまして聞こうとするけれど、ほとんど何も聞こえない。なんて静かなんだ、蟬々がものを食べる音って。

※この文章の中で、注目した言葉と対応している部分に、波線と傍線を引いてみよう。

創作の楽しみ『短歌と俳句』　その4の②

2年（　）組（　）番（　　）

【学習〇】次の短歌・俳句に表現されている世界を豊かな表現の特徴をふまえて豊かに想像し、文章で表現してみよう。

「蟬蟬のツートンカラーの触角が人の気配を確かめ始め」　真鍋正男

・句切れ【　句切れなし　】・構成　前半【　　】―後半【　　】
・この歌の新鮮さ・おもしろさ
・特に注目した言葉・・・
・これらの語や表現に注目して、こんな風に想像しました。

読んだ人（　　）
① 【　　】② 【　　】
③

「　蟬父を追ひつく速さで蟬が鳴く　」　大西泰世

・季語【　蟬　】季節【　　】
・取り合わせである二つの素材は（　　）と（　　）
・この俳句の新鮮さ・おもしろさ
・特に注目した言葉・・・
・これらの語や表現に注目して、こんな風に想像しました。

読んだ人（　　）
① 【　　】② 【　　】
③

【学習〇】お互いに読み合って、「何のことを詠んでいるのか」、その時、色べンで上の例のように線を引いて確認しよう。
①句は【◎・○・△・×】で評価すること。
②それぞれの意味が的確に捉えることができているか。
③鑑賞文の中で特に優れていると感じた表現についてコメントしよう。
例　「こんなふうに工夫した表現作品がいい感じ」・・「もの食ふ」というまだいい行動との対比をよく理解している。

【学習〇】今日の短歌・俳句を音読しよう。　聞いたよサイン（　　）

★今日の評価

表現の特徴をふまえて豊かに想像した心情や情景を、的確に文章で表現することができたか―【　　】

◎ よくできた　○ ほぼできた　△ あまりできなかった　× まったくできなかった

②学習1　これまで取り上げた短歌と俳句に用いられていた表現技法と、五感について、ワークシートに記入しながらまとめ、確認。

【短歌・俳句の表現技法の知識の習得】

③学習2　「ずぶ濡れのラガー奔るを見おろせり未来にむけるものみな走る」の短歌と、「湯に立ちて赤子歩めり山桜」の俳句のどちらか一つを自分で選び、鑑賞文を書かせた。

【俳句・短歌の鑑賞の仕方の習得と活用】

④学習3　六～七人のグループを作り、ワークシートを隣のグループに渡す。グループ内で回しながら読み、評価欄に評価していく。評価の視点は前時と同様。ただし、コメントは三人目に読んだ人のみが書く。その後、評価のポイントを最も満たしているものを、話し合って一つ選ぶ。

⑤各グループで選んだ鑑賞文を、グループの代表者が、全体に発表する。コメントも一緒に読み上げる。発表を聞いたら、拍手！

⑥短歌「ずぶ濡れの…」と、俳句「湯に立ちて…」の暗唱。

⑦自己評価。

Ⅳ　学習者の反応

この日も真剣に取り組んでいた。自分とは違う視点や感じ方、表現の仕方に学んだものは大きかったと思われる。選ばれた作品はみな力作で、発表されるたびに、感嘆の声が上がっていた。選ばれた学習者たちは、照れくさそうにしていたが、うれしそうであった。学習者自身の活動によって素晴らしい読みが授業にいくつも出され、それを共有できた授業であり、授業者としても感慨深いものとなった。

【選ばれた作品例】

・短歌「ずぶ濡れの…」の鑑賞文

「決勝戦の勝敗を決める大事な一点というところで降り出した突然の大雨。まるで頭からバケツの水をかぶったようにあっという間に全身ずぶ濡れになった選手たち。きっとボールを持つ手もすべり、視界も悪いだろう。しかし、選手たちは必死にボールを追いかける。片方が点を取れば優勝が決まる。…選手たちは勝利という未来に向かってがむしゃらに走っている。これから生きていく上でもこの選手たちは雨風のようなどんな困難にも負けることなく自分の目指すものに向かって走り続けていくのだろうなあ。」

・俳句「湯に立ちて…」の鑑賞文

「春のあたたかい日。最近少し立つことができるようになった女の子が、外でお母さんと遊び、泥だらけになって帰ってきた。帰ってすぐお母さんはその子をお風呂に入れた。風呂の湯の中で嬉しそうに立ち上がっているのは、きっとお母さんと一緒に遊んだことが楽しかったのだろう。お風呂からあがって、お母さんの膝の上で眠る女の子。窓から見える山には白くきれいな山桜が咲いており、女の子の白くて柔らかい肌と同じようである。山桜が赤紫色のさくらんぼを結ぶようにその子の成長も楽しみである。」

第六時（ワークシート「創作の楽しみ『短歌と俳句』その6）

Ⅰ　目標　短歌・俳句の表現方法の特色や効果を活用し、創作する。

※資料2

創作の楽しみ　短歌・俳句　　2年6組作品

第一位（各7票）

こたつの中人と犬の脚十本

【選評】
・足10本ということは、人が三人で犬一匹なのか人が一人で犬二匹なのか分からないところ。
・人と犬が一緒にこたつに入っている様子がよく分かる。こたつの中のことを上手く書いていてすごいと思った。
・脚10本という表現がいい。家族が犬と一緒にみんなでこたつを囲んでいる様子がよく伝わってくる。
・犬も人も一緒にこたつにいるのが面白い。　・人と犬の脚10本
・人と犬の脚がこたつにある場面が想像できておもしろい。

僕は飛ぶひらひらと舞う青虫の夢

【選評】
・小さな生き物も夢を持っているというのが伝わった。
・青虫に注目したところがすごいと思った。
・擬人法、感動しました。蝶の目線で書いていてめずらしい。
・夢を持って生きている青虫の気持ちが伝わっている。
・蝶々を基盤としながらも青虫を主体としている。
・青虫の希望を掴いておもしろかった。
・かわいい青虫の思いが伝わってくる。

タンポポの周りを泳ぐアゲハ蝶

【選評】
・蝶なのに「泳ぐ」という言葉（表現）を使っているのが面白いと思った。（二人同意見）
・アゲハ蝶がとんでいる、舞っている様子を、「泳いでいる」と表現しているところが面白い。ぴったりな表現だと思う。
・イメージしやすい。「泳ぐ」…あたかも泳いでいるように表現している。
・アゲハ蝶が「泳ぐ」と擬人法を使っている。
・「泳ぐ」タンポポの周りを泳ぐという表現がさんしんだった。
・アゲハ蝶の姿を「泳ぐ」と表現したところが面白い。

満開の私の思い散る桜

【選評】
・「思い散る桜」桜の花びらが散るように、秘めていた思いもはかなく消えゆくイメージ。
・春は出会いの季節でもあり、別れの季節でもある。そのことがとても伝わってくる。
・対比の表現があっていいと思った
・満開の桜と私の思いを関係させていて、すごくいい考えだと思う。
・満開←→散るの対比で散る桜の悲しさを思い浮かべる。
・満開の思いを桜にたとえて、それが儚く散ってしまった悲しさを上手く表現している。
・情景が想像しやすい。自分の思いを花にたとえているのがよい。

第二位（6票）

蝶々の空に飛び立つはなやかさここから一歩踏み出す勇気

【選評】
・蝶々が飛び立つ様子を一歩踏み出す勇気との組み合わせが面白い。
・「はなやかさ」と「勇気」体言止め。春の決意と蝶のはなやかな飛ぶ姿の対比がよい。
・擬人法・対比・対句。最後の一文がいいです。
・前へ進もうというのがいいと思った。　・勇気が良いなと思った。
・蝶が空に飛び立つように、自分も勇気を出して新たな一歩を踏み出そう、と言う気持ちが伝わってきた。

第三位（5票）

よくばりな小さな蝶は大きな花

【選評】
・小さいと大きいの、大きさの対照。　・小さい蝶と大きい花が対照になっている。
・小さな蝶と大きな花の対比。人間でもやりそうなことを蝶で表現しているところ。
・小さい蝶と大きい花の対比が面白い。
・「よくばりな」という表現が面白い。蝶が集まれば大きな花みたいに見えるからかなといろいろ想像できた。

第四位（各4票）

木漏れ日や悠然と揺れる金の尾よ　その後ろ影に〝者い〟を見ゆるか

ヒラヒラとお日さま連れて蝶が来る

雪の中こたつにもぐる足元に心もなごますネコ型ガイロ

冷たき風の吹く路地に猫の親子の愛見たり

しんしんと雪降り積もる冬の朝一歩踏み出す足跡一つ

持久走上から見下ろす10分間次は自分とたいぎく思う

四十台おじさん走る河川敷走る理由は気になる腹か

パチパチと早く食べなよ魚がさそう一分おきにふた開ける

口いっぱいかこんだ鍋のぬくもりよ

Ⅱ　展開

①　学習1「犬」「猫」「蝶」「飲む・食う」「歩く・走る」の題詠の中から、短歌・俳句の題材を探す。マインドマップを使い、印象に残っている場面や心情を、5W1Hや五感を駆使して言葉を書き出させていった。

②　学習2学習1で集めた場面の中からいくつか選んで、短歌・俳句を創作させる。

【短歌・俳句の表現技法の知識の習得と**活用**】

③　自己評価。

Ⅳ　学習者の反応

創作は、夏休み明けにも行っていたが、今回は「学んだことを活用して」という条件を課していたため、学習者たちはかなり苦労していた。マインドマップは、言葉を引き出す手段として取り入れたが、使いこなせていない者が多くいた。これも他の単元などでトレーニングを積んでから用いさせたほうがよかったかも知れない。最終的には、全員がなんとか短歌一首、俳句一句を創作することができた。

第七時～

Ⅰ　目標　創作した短歌・俳句を相互に鑑賞し、評価する。

Ⅱ　展開　**※資料2参照**

①　クラス全員の作品を読み、短歌・俳句をそれぞれ二つずつ選ぶ。その際、内容が表現技法によってよく伝わってくるか、言葉の選び方や取り合わせ、構成に新鮮さや発見があるか、など、具体的に評価ポイントを書かせた。同時に今回の単元について自由に感想を書かせた。

【短歌・俳句の鑑賞の仕方・表現技法の知識の習得と**活用**】

②　次の時間の初めに、得票数の多かった作品と、それを選んだ人の評価のコメントを10作品～15作品印刷して配布し、全体に紹介した。今回の単元を振り返り、学習者の感想を紹介しながら、改めて「ことばの力」についての授業者の思いを伝え、単元のまとめとした。

Ⅳ　学習者の反応

自分が苦労して創作しただけあって、クラスメイトの作品に食いつくように読んでいた。作品は100程度あったので、選ぶのに苦労していたが、選ばれた作品とその選評を見ると、学習者の、鑑賞する視点の的確さと感受性の豊かさが感じ取れた。単元に対する感想は、大半が、今回の授業は新鮮だったこと、楽しかったことなど、肯定的にとらえたものであった。

三　学習者の感想

「創作の楽しみ『短歌と俳句』の学習（鑑賞文作成や意見交流、創作など）についての感想を書いてください。」として、自由に書かせた。全体的な主な反応として、今回の活動について、「楽しかった」「新鮮だった」「面白かった」と書いていた者が、81名中72名おり、ほとんどの者が肯定的に今回の学習を評価していた。具体的な記述内容で多かったものを、次のような観点でまとめた。

A「短歌・俳句の学習や鑑賞に対する苦手意識の変化」（25名／

31％）

・　最初は難しいと思っていて、あまり進んで授業を受ける気にならなかったけど、だんだん短歌や俳句の味がわかってきた気がします。鑑賞文では、クラスの人の様々な作品を味わって、自分の感性に新たなものを取り入れることができたと思います。新聞に載っている短歌や俳句・川柳も、時々見て味わうようになりました。暇ができたら、また自分で創作してみたいです。

B「**短歌・俳句の魅力の発見**」（25名／31％）

・　私は、長い文で表現するよりも、短歌や俳句で表現するほうが詠んだ人の気持ちがより濃く表れると思いました。鑑賞する側は、その短い文からどんどん場面の想像をふくらませて、その世界観に浸ることができるので、面白いと思いました。

C「**鑑賞すること・想像することの面白さ**」（29名／36％）

・　普段の評論や小説と違ってとにかく想像力を一番働かせる！という新鮮な授業でとても楽しかったです。

・　一つの言葉にいろいろな意味が込められていて、どんどんイメージがふくらんでいって、短い言葉の集まりから、一つの物語ができていくのは本当に面白かった。

・　小説とかみたいに答えを縛られない学習だったので、思ってたより楽しかった。自由な発想で情景を思い浮かべたり、作者の思いを考えたりできて、心が豊かになった気がする！？いろんな俳句・短歌を知ることができて、鑑賞することによって想像力も膨らんだと思う。

D「**創作の難しさと面白さ**」（42名／52％）

・　一番難しかったのは創作です。ひとつひとつ真剣に考えればいく作品ができたのでよかったです。考えるほどわからなくなりました。でも最後には自分の納得の

・　自分の作った短歌や俳句は世界に一つしか存在しないと思う。皆人それぞれが自分の思いを歌にのせ描いてゆく。とても感動的で素晴らしいことだと思う。短歌や俳句を書くということは自分と向き合っているみたいで楽しい。

E「**意見交流、相互鑑賞の楽しさ**」（56名／69％）

・　鑑賞は、人によって想像にもとらえ方にも差があってとても面白かった。自分の意見を言うのはとても恥ずかしかったけれど、人の意見は毎回別の見方を知れて、一枚だった紙がどんどん多面的になっていくのを見ている気分で楽しかった。

・　他の人と鑑賞し合うことで、人それぞれ感じ方が違うんだと改めて思うことができたし、それに影響されて、自分自身もうまく鑑賞ができるようになったと思いました。

F「**表現技法や鑑賞の仕方を身につけ、生かすことができた**」（16名／20％）

・　最初は創作の仕方や鑑賞の仕方が分からなかったけど、何回もやっているうちに自分の意見が書けるようになった。

・　はじめは、短歌や俳句を自分で作れと言われた時、抵抗があったが、授業を受けいろいろな表現技法を習うごとに、作りたいという気持ちが高まっていった。実際に、俳句や短歌を作るのは楽しかったし、みんなが作った作品を読むのも楽しかった。

・　これまでに短歌・俳句と本格的に創作したことはなかったのだが、まず鑑賞をして、→情景を想像→そして創作といった順序に沿った学習で、この過程の中でたくさんの短歌・俳句の知識を身につけたと思う。そして創作では、それらの知識を生かすことができた。さらにほかの人たちの作品を鑑賞することで理解が一層深まったと思う。

四　考察とまとめ
―本単元における習得・活用・探究―

今回の単元は、もともとは、学習者が「主体的に」活動する場をいかに授業の中に作り出すか、ということに取り組んだものであったが、このことは「習得」・「活用」・「探究」とどう関わっていたのだろうか。

今回学習者に「習得」させたかった事項は、主に次の単元の目標に示したとおりである。

1情景や心情を把握し、より深く味わう鑑賞の仕方を身につける。
2短歌・俳句の形式と表現方法の特色とその効果を理解し、創作に生かすことができる。
3発想や想像力を豊かにし、言葉に対する感受性を磨く。

これらを「習得」させるための方法として、一つ一つの短歌・俳句について、その表現方法の効果に注目し、鑑賞していった。鑑賞は、「書く」「話す・聞く」「読む」といった言語活動を取り入れ、その活動を通して行った。それぞれの活動の中で具体的にどんな事項や力の習得や活用を目指したのかは、前述の「授業の概要」の中に【俳句・短歌の鑑賞の仕方の**活用**】のように示した。太字は、授業者の意識の中で重点を置いていたものである。今回振り返りながらまとめていくうち、一つの活動の中に「習得」「活用」両方の要素があることに気づいた。

学習者の感想から、はじめは何を書いていいか分からなくて戸惑っていた者も、授業が進むにつれて鑑賞文を書くことに抵抗感がなくなっていったことが分かる。鑑賞の視点や内容も、徐々に的確かつ豊かになっていった。こうしてみると、「習得」というのは、第一時の基礎知識を学習する場面や、第二時や第四時の鑑賞文例を読んで鑑賞の仕方を学習する場面などの、知識や方法を「知る」ことよってのみなされるのではなく、それを実際に「活用」して言語活動を行っていくことを通してはじめて、徐々に自分の力として獲得していくものなのではないか。つまり、「習得」と「活用」との関係は、並列される別々のものではなく、「習得」によって「活用」が可能になり、また「活用」によってより「習得」が確かで深いものになっていくといった、相互に深く関わり合うものであると考えられる。

では、「主体的」に活動するということは、どういう意味があるのだろうか。「主体的」な態度や意欲は、「習得」「活用」に取り組む際に、その学習効果を大きく高めるものだと思われる。いくら言語活動を取り入れても、学習者の態度が「受け身」で、学習に対して必然性も意欲も感じていないような状態では、「習得」は難しい。今回のように鑑賞に苦手意識を持っている学習者も少なくない中では特に、ただ活動させるのではなく、学習者が目的意識と緊張感を

持って活動に臨み、活動後に達成感や面白さを味わえるように、さまざまな工夫が必要であった。目標を明示すること、「書く」際に、後で学習者同士が相互に読み合ったり話し合ったりすることを予告しておくこと、書いたものや話したことについて、必ず相手から質問・評価・コメントといった反応が返ってくるようにしたこと、などである。また、何回か同様の活動を繰り返すことで、「次はこれを取り入れてみよう」「次はここを改善してみよう」という風に、自らの課題を自覚し、その課題に「主体的に」取り組む姿勢が少しずつ生まれていったと思われる。

学習者の感想を見ると、本単元の中で「主体性」や「意欲」を生じさせた一番の源は、学習者同士の交流ではなかったかなと思う。互いの感じ方やものの見方の違いに面白さを感じ、想像力や表現力に刺激を受けることによって、次の学習への意欲が生まれていったようだ。また、自分が真剣に取り組むと評価も真剣になり、自分にも真剣に評価されたものが返ってくる。このように、読みを交流し合い、評価し合う活動は、自らの学習への取り組み方が問われるという意味で、学習者に「主体」としての自覚を促すものかもしれないと感じた。

最後に、「探究」について。今回の学習は、「探究」的学習にどのようにつながっていくだろうか。鑑賞や創作に必要な「想像力」や「発想力」、生活の中から取材し、取捨選択し、言葉を吟味・精選して「表現する力」は、あらゆる「探究」活動の過程においても同じように必要な力である。また、身の回りや社会の事象に対してどう感じ、何に問題意識を持つかといった「感性」や様々な「ものの見方」を養っておくことは、課題を設定する際やそれを考察していく際の基盤となるだろう。なによりも、「ことばの持つ力」「ことばの可能性」を実感できれば、「探究」における言語活動に対して真摯に取り組む態度につながっていくのではないか。今回の学習が、教科を超えた「総合的な学習」の探求的活動に少しでも活きていってほしいと思う。

これらの力は、当然のことながら、一単元だけでつくものではなく、日々の授業の中で、また様々な種類の文章を通して、地道に、長期的にこつこつ培っていかなければならないものである。とはいえ、時間的な問題を始め様々な制約がある中で、いつもこのような取り組みができるわけではない。実際今回の単元以降、提案者自身なかなか言語活動を中心に据えた授業はできておらず、冒頭に述べたような課題はいまだに克服できていない。しかし、今回の提案に向けて、授業実践を振り返る機会をいただき、「言語活動という『活用』を通して『習得』させること」、「学習者同士の交流を取り入れて意欲づけをすること」、「想像力や発想力を必要とする活動を適宜取り入れること」の大切さに気付かされたことは大きな収穫だった。今後の授業に積極的に取り入れていきたい。そして、学習者が「ことばの持つ力」や「可能性」を発見し、「ことばを用いる力」を磨いていけるような授業をこれからも模索していきたい。

最後に、取り組みをまとめるにあたり、多くの方々にご指導いただき、お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

（広島県立祇園北高等学校）